

平成25年度の校内研究について

東近江市立能登川南小学校

1. 研究主題

教科等	研究主題
国語科	自ら考え学ぶ子どもの育成 ～書く意欲、書く力を高める指導のあり方～

2. 主題設定の理由

平成23・24年度は、窓口を国語科「書く活動」に焦点を絞り、系統的な指導のあり方を研究することによって「書く力」を育てていき、自ら考え学ぶ子どもの育成に迫りたいと考え、取り組んできた。

どの学年の授業研究会でも、書くための意欲づけを図りながら、取材・構成・記述・推敲・交流などの指導事項を重点化して、発達段階に合わせながら工夫した学習に取り組んできた。その結果、書く意欲が増し、書くことに抵抗なく取り組む様子が見られた。また、目的意識・相手意識を持って書くようになり、伝えるために分かりやすく書くように意識している姿も見られた。

授業研究会を通して、学習の中で大切にしていかなければならない点として以下の7点が明確になった。①書く意欲を高めるための場の設定をする。②書きたいことを明確にして相手意識や目的意識を持たせる。③学習の流れを視覚化して見通しを持たせる。④成果の見える学習を取り入れて達成感を持たせる。⑤スモールステップでの学習計画をする。⑥取材から構成までの工夫をする。⑦推敲や交流の場の指導・支援の工夫をする。また、研究を支える日常の取り組みとしては、朝の読書活動も定着してきて、進んで読書をしている姿が多く見られた。

このように子どもたちの書く力は向上し指導方法の工夫もできてきたが、「書くこと」のアンケート結果からも分かるように、まだまだ、書くことを苦手としている子や好きでない子もいる。豊かな表現力を身につけるまでいけない子・要約する力がない子どもたちも多く、個人差が大きい。

どの子どもが意欲を持って書き、各学年で身につけたい書く力を高めるためには、子どもたちの実態を見つめて書くことが好きでない原因を探り、楽しんで書くための手立てや発達段階に合った書く力をつけていく指導を考えて書く活動の充実を図っていく必要がある。

そこで、今年度の研究主題は、昨年度に引き続いて『自ら考え学ぶ子どもの育成』副主題を～書く意欲、書く力を高める指導のあり方～とした。昨年までの2年間で研究した発達段階に合わせた系統的な指導を大切にしながら、書く意欲、書く力を高めるための指導のあり方を研究していきたい。自ら考え学ぶ子どもを育てるために、学習成果の見える化を図り達成感を持たせる工夫を重点的にしていきたい。国語科の書く活動領域だけでなく、各教科領域においても様々な必然性のある書く場を設定して指導していき、書くことに慣れるための日常の取り組みを継続していく必要がある。

また、豊かな表現力を身につけるためには、子どもたちの語彙を増やすことが大切である。読書活動・音読・スピーチ・日記等を続け、他教科でも幅広く書く活動を取り入れるなど日常実践を地道に取り組んでいくことが必要である。朝のスキルの時間を活用してや短作文や言葉集め・視写・暗唱などを、全校で継続的に取り組めるように進めていきたい。

3. 研究の仮説

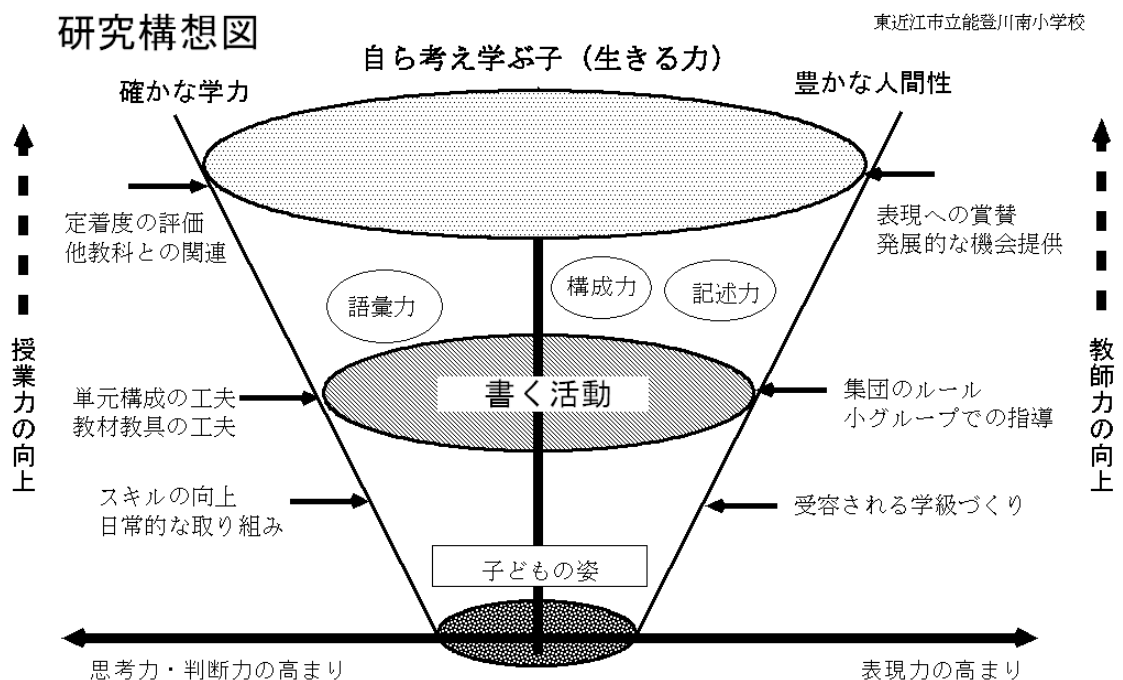
国語科の授業や日常の実践の指導において、つけたい力を明確にした授業づくりや、書くための知識や技能をつける指導を積み重ねていけば、子どもの書く意欲、書く力を育てることができるであろう。

4. めざす子どもの姿

進んで自分の思いや考えを書き、相手や目的に応じてわかりやすく書き表せる子ども

低学年	・自分の思いや考えを進んで書こうとする子ども
中学年	・自分の思いや考えを、相手や目的に応じて工夫をしながら書こうとする子ども
高学年	・自分の思いや考えを、目的や意図に応じて適切に書こうとする子ども

5. 研究の構想



- 授業の中核を「書く活動」の時間とする。いろいろな学習の中で書く活動の時間を確保することによって幅広い思考を生みだし、生き生きした表現につなげる。
- 書く場の設定の工夫をする。書きたいことや書くべきことを明確にし、どんな方法で伝えることが効果的であるのかを考える学習活動をしていく。よい表現や表現の工夫の仕方についての指導・学習活動を日常的に行う。
- 基礎・基本となる語彙力や構成力・記述力などの指導を工夫して、全員の「書く力」を高める。
- 学習成果の見える化を図り、達成感を持たせる学習をしていく。
- 自分の書いたものを読み合い、交流する中で、様々な人と温かい人間関係を築ける子をめざす。

6. 研究の内容

- ①「書く力」を育てるための国語科の授業の改善と実践
 - ア 研究の中心を「書く意欲」「書く力」を高めることとし、学習した知識や技能を生かしわかりやすく書く能力を育てる。
 - ・めざす子ども像を明らかにし、つきたい子どもの力を明確化する。そして、子どもの現状を客観的な事実（アンケート・授業の様子）から捉えながら、課題を明らかにしたり手だてを具体化したりする。

イ 指導の工夫

- ・今までの国語の授業における指導方法の改善を図る展開の工夫・発問の工夫など
- ・ワークシートの工夫・付箋の活用・メモをためる等の成果が見える学習を取り入れる。

ウ 意欲が高まる単元を貫く言語活動の充実

②継続的なスキルの育成の工夫

ア 視写の活動

- ・ねらいを明確にして、様々な文章を書き写す活動を繰り返すことによって、書くことに慣れ書くために必要な知識や技能を身につける。

イ 作品の発表の場の確保

- ・作品掲示(放送室横) 詩や作文など
- ・学級通信などで伝えていく。

ウ 短作文

- ・200字程度の短い文章を短い時間で書く学習を年間通して繰り返す。

③教科・道徳・特別活動・総合的な活動の時間などにおける言語活動の工夫

- ・「書く活動」の時間・場の確保
- ・ノート指導 1時間の学習をまとめて書く・工夫したノートづくり

7. 研究をささえる日常の取り組み

① 言語活動の充実と言語環境の整備

- ・朝の会でスピーチや音読に取り組む。繰り返し練習することで、相手を意識して分かりやすく話すためのスキルが身につく。最後まで話しきることや声の大きさなどを意識させて日常生活にとけ込ませることで、国語科で指導したことが身に付くようにしたい。
- ・日記や作文を継続して書く活動を充実させ、日々の生活の中で感じたことや考えたことを自分の言葉で書き留める習慣をつけていく。漢字大相撲などを取り入れて、楽しんで漢字を作文や日記の中に書けるようにする。
- ・校内掲示による言語環境の整備を行う。

② 読書活動による語彙の広がりと言力の高まり

- ・読み聞かせや音読、暗唱などの多様な読書活動を行なうことで、語彙を増やし、広げ、表現力を高めていく。また、読書によって心を耕すことで、友だちを思いやる気持ちを育み、人と関わる力につながられると考える。
- ・担任以外の先生の読み聞かせを取り入れる。
- ・学期に1回全校で詩や百人一首の暗唱チャレンジを行う。
- ・「家読」の取り組み・・・金土日に関係で本に親しむ20分間

8. 研究を教員が互いに深める方法

① P-D-C-Aスタイルの発展的授業研究

○P (PLAN)：指導案の作成

D (DO)：授業の実践

C (CHECK)：授業研究会の実施

A (ACTION)：見えてきたことを次の学習や次年度につなげていく。

○研究の視点を明確にして、実証的な授業を行う。

②授業参観カード

○授業の視点を明確にし、授業研究会での討議の柱とする。

○時間がなく話し合うことができない内容も個々に記録し、事後に役立てる。

○全体研究会の翌日までに回収する。

③授業記録と抽出見の記録

○教師の問いかけや支援と児童の活動との関係をわかりやすくする。表現活動を記録するため、VTRを使用して音声記録を残していく。子どもの書いたものを残していく。

○板書記録や操作活動や体験活動の様子をカメラに納め、授業後の考察に活用する。

(デジタルカメラ)

④評価基準の明確化と具体的目標

○具体的にどれだけの到達度が予想されるか、評価基準とともに目標達成率を設定しその結果から成否の原因をさぐり、授業の重要なポイントを見つけ出す。また、子ども自身による評価を取り入れ、「子どもの達成度」と「教師の達成度」の両面を検証する。

⑤幅広い意見交流

○多様な討議の形式を取り入れ、幅広い意見交流を可能にする。異学年部によるグループ討議やテーマ別のグループ討議などを実施する。各教科主任は専門的な立場から、その教科特有の学力観や表現力「書くこと」のあり方について情報提供する。

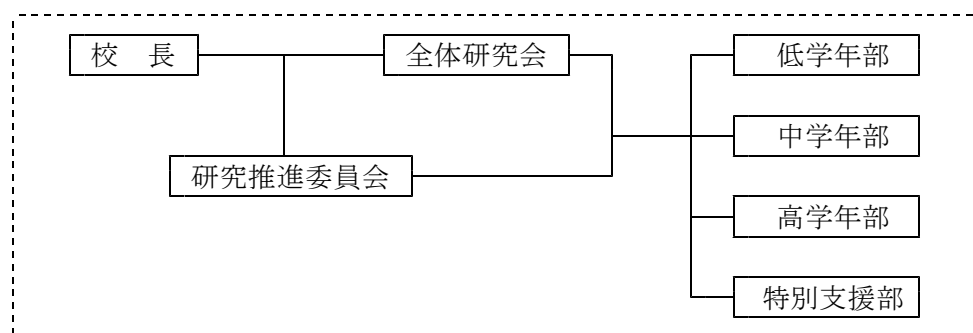
⑥事前・事後の研修

○学年部で事前研究を進め、指導案を練り上げていく。

○研究機関や講師の先生との連携を深め、研究授業までに授業のポイントなどを知っておく。

○研究授業後全体会で見いだした授業改善の方向性を有効に活用し、実践的な表現の場面まで結びつける。研究授業だけでなく、単元を通してどのように改善できたかをふりかえる。そのためにも、子どもたちの表現したものや言葉を記録しておく。

9. 研究体制



①研究推進委員会（校長，教頭，研究主任，教務主任，各学年1名）

○校内研究会のテーマや方向性を検討する。

○指導案や研究紀要の内容を検討する。

○研究授業の日程を調整する。

○各学年および学年部の取り組み状況を交流する。授業研究の視点の持ち方，授業後の基礎・基

本の力や表現力の定着度や達成度について話し合う。

②全体研究会

- 研究授業後に研究課題に沿って討議し、授業改善について学びあう。
- 日常の取り組みを発展・深化させるために、互いの実践を交流し合う。
- 講師を招聘し、先進的な取り組みや手法を伝授いただき、研究がさらに深まるようにするとともに、職員全体のものになるようにしていく。

講師 教育センター 加藤由紀研修指導主事

③学年部会

- 研究授業は各学年ごとに進める。
- 事前、事後の授業を含め、全員が研究に関わる授業公開を実施できるようにする。
- これまでの研究が、継続・発展するよう研究のつながりを重視して、学年研究に取り組む。

10. 研修計画

	授業研究会(全体会)等	その他
4月	24日(水) 校内研究会(全体会)	22日(月) 研究推進委員会
5月	29日(水) 授業研究会① 3年	20日(月) 研究推進委員会
6月	26日(水) 授業研究会② 5年	17日(月) 研究推進委員会
7月	10日(水) 授業研究会③ 特別支援 22日(月) 夏季校内研修会 (全体研)	
8月	6日(火) 夏季校内研修会 (学年研)	
9月		25日(水) 研究推進委員会
10月	2日(水) 授業研究会④ 4年 30日(水) 授業研究会⑤ 2年	21日(月) 研究推進委員会
11月	13日(水) 授業研究会⑥ 6年	5日(月) 研究推進委員会
12月		研究紀要執筆開始
1月	22日(水) 授業研究会⑦ 1年	14日(火) 研究推進委員会 31日(木) 紀要執筆〆切
2月	26日(水) 校内研究会(全体会) (次年度の方向性)	17日(月) 研究推進委員会
3月		研究紀要完成

※特別支援学級は、児童理解を含めて1学期中に授業公開をする。